
〇〇〇 ～君たちがいる世界で～

k.i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〇〇〇 君たちがいる世界で

【Nコード】

N5126W

【作者名】

k.i

【あらすじ】

現実……つまり仮面ライダーが存在しない世界。その中でも仮面ライダーを目指す科学者がいた。科学として、オースとして、彼は現実に生み出されたグリッドと戦う。

001 television 〜テレビ〜

ブブブ………。

テレビが映っている。それは、ある番組を、ただ漠然と、映し出していた。

そして、テレビは見せる。紫の恐竜を模したヒーローとその横に描かれる、恐竜と鳥の怪人を。

そこには、赤い文字で、書かれていた。

”このあとすぐ”

また、同時に予告の音が響く。重低な、吹き込みされた男性の声。
『仮面ライダーオーズ このあとすぐ』

テレビは、ただこの番組を映し続けていた……。この先の未来を見つめるように。

まるで本当に『オーズ』が存在する——その事実を象徴するかのよう。

002 tree 木

カサリ。

乾いた音がした。

林上^{りんかみ} 樹博士^{いつき}が森の木に触れたのだ。樹の年齢は四十代。若々しいが口元のシワが四十代であることを示していた。

森の間からは日光がまっすぐに差し込み、彼の黒ぶちの眼鏡をキラリと輝かせる。木々の葉の間からは、他にもたくさんの光が地を照らしていた。

樹はふつと息を吐くと、木に触れていた左手を木の皮から離れた。ドサ、と樹はリュックをきれいな茶色の地面に下ろした。リュックは真つ黒。また、樹の服装も黒かった。服装もまた黒い。登山用のごつい服はあくまで闇色だった。

チー……。

金属質の音がささやくように聞こえる。リュックのチャックを開けたのだ。樹はそこから小さな一眼レフカメラを出した。すばやく電源をオンにし、木々に向けて構える。

カシャ。シャッターが閉じる音が耳に届くと、すぐにリュックにカメラをしまい、次に青い大学ノートを出した。題名は書かれていない。

いや、題名らしきものが、小さく書かれている。本当に小さな字で、『000』と、赤いボールペンで。研究物の名だろうか。

パララ、と樹は目的のページをめくる。一ページーページ、文字で埋め尽くされている。一部は写真もあったが。そして、そのページはすぐに現れた。

ページのタイトルには、緑のマークで、『ガタキリバ』とだけ書かれている。その後数ページもまた、字で埋め尽くされている。内容は、木々の状態等が多い。どう見てもガタキリバと呼べるようなものはなかった。

だが、全てを知る樹博士は、『ガタキリバ』の項目に出されている最後のページを出す。ノートの全四十枚中、八枚が『ガタキリバ』の項目の内容だ。

先ほど撮った写真を載せる余白を残した上で、項目の内容を書く。『二千三十七年五月一日。木々の状態は良好。コアによる森林の侵食は見られない』

他の所も、同じような内容が書かれていた。

「コアの欲望は別の形で、作用をもたらすのだろうか」

樹はうーんとうなった後に、つぶやいた。その目は、今だ良好状態を保つ木々に向けられている。視線をやると、周辺の葉たちがふうー、となびいた。

『コア』について樹博士が、

「どうということなのか」

とつぶやいていると、突然、誰かの声が森の均衡を破った。

「林上博士、そろそろ行きますよー！」

女性のトーンが高い声。助手の一人だ。樹がはっとその場所を見やると、中型のワゴンが土の道路に駐車されている。

「わかった、今行くよ」

聞こえるよう、叫ぶように返すと、樹はワゴンに向かった。

003 combo 〜コンボ〜

樹は、鼻歌を歌いながら車に乗ると、

「よろしく」

目的地に向けて走り出させた。

車内は、黒好きの樹とは違い、きちんと夏の日差しの暑さも考慮した色になっていて、赤茶だった。テレビもついており、DVDを見たりCDを聴いたりすることが出来る。

「どっこいしょ」

樹は先ほどのリュックからDVDを出した。真っ白な下地に『オーズ コンボメロディ』と黒いマジックペンで書かれ、そのタイトルの下には八種の丸があり、その丸の中には赤、黄色、緑と、多種多様の色で三種の動物を、まるでくしだんごを一気に合わせてしまったようなマークが描かれている。

樹博士はCDプレイヤーのケースを開き、そのCDを入れた。ギーという音とともにCDが機械の中に吸い込まれる。

その後、プレイの図柄のボタンをカチリと押した。車内にいる二人は無言になり、辺りにはワゴンの走行音だけが響く。

そして不意に、ギターの重低音とともにパート1が始まった。

『タカ！ トラー！！ バッター！！！！ タ・ト・バ、タトバタツトツバ！！！！』

最後の、強めにアクセントをつけて『タトバ』と聞こえると、樹はにこにこしてごくごくうなずき、となりの研究員はあきれたように顔をしかめた。

「いいねえ、やっぱり『タトバコンボ』は」

「博士、またそれですか！ 博士の仮面ライダー好きはよくわかりましたが、毎回それを聴いてると、ほんと耳に焼き付いちゃいます」

そう会話を交わすうちに、他の『コンボメロディ』が流れていく。

このコンボというのは、二千十一年に放送された特撮番組である『仮面ライダーオーズ』の中で、主人公が変身する『オーズ』が活躍する物語である。

オーズはそれぞれのコアメダルという八種の色を持つメダルを使って変身する。そのコアメダルをめぐる物語、というわけだ。

そして、赤、黄、緑の順または同じ色のコアメダルを三枚使って変身した場合、『コンボ』というより強い形態になることが出来る。さらに、独特の『コンボメロディ』も流れるというわけだ。樹が今聴いているのは、それらのメロディである。そのコンボメロディは、使うコアメダルの名前から一部ずつとってつけられる。

例えば、さっきのタトバコンボは『タ』カ、『ト』ラ、『バ』ツタからとっている。

いよいよ、最後のパート、パート8がやってきた。ワクワクドキドキ、といった表情で待つ樹。

『プテラ！ トリケラ！！ ティラノ！！』 プットッティラノザウルス』

ザウルスを強く読んだ音声は、重低音音声としてワゴン内の空気を振るわせた。

パートが全て終了し、満面の笑みをたたえつつCDを取り出す樹。それを見た研究員は、もういいだろう、というふうにCDプレイヤーの電源を切った。

「博士、あと二分ほどで目的の神社に到着します」

「ああ、ありがと」

CDをリュックにしまい、ふうと息をついた後に、リュックをしょって降車の準備を始めた。

二人を乗せたワゴンは、まもなく、その神社、息吹神社に着いた。
「よし、と」

リュックをしようと、年齢に似合わぬ勢いで座席から飛び降りる樹。目はらんと輝いている。この場所に、自分の夢を叶えるものがあるのだ。

少し遅れて、軽い服装で研究員が降りてきた。今回、樹博士についてきているのは彼女のみである。他の研究員には、別の仕事を与えられていた。

「じゃあ、行こうか」

研究員の足が地についたのを見届けると、樹は、今度は年齢、職業がらに似合う、重い足取りでずしりと、赤いとりいに入っていく。
「はい」

研究員もまた、同じような足取りで歩いていた。

神社に入り、賽銭箱の前に立つなり、樹は五円玉を賽銭として放り込み、思い切り縄をゆらした。グワラン、と、大きな鈴が鳴り響き、同時に樹の、

「住職、おりますか？」

という声が神社の中にこだまする。

「博士、五円玉を入れたのだから、お願い事をしたりとか、しないんですか」

「ああ。ここの住職さえくれば僕の願い事は叶うさ」

仏に祈るのではなく住職のほうに声をかけた樹を、げんそうに見つめる。樹はその視線に対してにつこりと笑って返した。満面の笑顔だ。言葉どおり、これから住職がこれば、願いは叶う、ということだろう。

「まったく、いきなり呼びつけるための呼び鈴にうちの鈴が使われるとは」

少しして、シワが細かく刻まれた老齡の住職が神社のかけから現れた。白い服を着ている。法服、というのだろうか。ぶつきらばうな言葉を発するのは、彼の性分と言えた。しかし、同時に、自然を愛する心清き住職ということでも有名だ。だから、そのようなことにも動じず、樹はにつこりと答えた。

「いやあ、すみません。今なら、仏の鈴もいいもんに聞こえますし」「ほう。そこまで悟るとはな。で、用件は？」

こくりと頭を揺らし、住職が聞く。

「例のアレです。自然の中で放置してもらったの。よろしく願います」

「なるほどな。あのわけのわからん研究物が」

「はい。自然の中で放置する必要があったので」

ふうと息を吐くと、住職は再び神社のかけに戻り、すぐになにかを持って戻ってきた。

それは、黒かった。科学の研究物にしては似合わない石で出来た、円状のもの。表面には、これまた丸い、半径三センチほどの円が十個丸く並べられている。

「ありがとうございます」

住職の手に乗っているそれを樹は本当にありがたそうに受け取った。

「用件はそれだけか」

わたすなり、目をぴくぴく動かしながら樹に言う。樹は今度は科学者らしくこくつとうなずいた。

「ええ、もう終わりです。これをさっそく研究せねば」

「ふつ。それがそつち側の性さがというものか。よろしい。帰れ」

ぴつと、右手の人差し指をとりいの外の赤茶ワゴンに示した。

「今日は本当にありがとうございます！」

ぺこつと礼をすると、研究員と共に石の通路を引き返し、ワゴンに戻っていく。

「フン」

息を鳴らすと、住職はまた神社のかげに。

「よし、帰ろうか」

「そうですね」

助手席に乗り、ワゴンで元の研究所に帰る。だが、このときばかりは、後ろで起こっている現象に一人は気づいていなかった。

緑に輝いていた森の木々たちが、さわわわ、と風が流れたように音を立て、一斉に枯れていくのを。樹が悩んでいた、『自然への影響』が、今まさに起こっていた。

「なんということだ」

森林たちが色を失っていくのに併せて、住職の顔も、色を失い、青くなる。

「どうなっている。あの研究物に、何かあったのか」

住職の目から、透明なしずくがたれ、おおと声をあげた。愛する自然が、今力を失っていく。絶望を絵にしたような状況だった。

樹はそのことに気がつかない。その目はただ、両手を広げて持っている石版にのみ向けられているのだ。

「なに!？」

真っ白な感じの漂う研究所、『林上研究所』に帰ってくるなり、樹はぎよつとしてテレビの速報を見た。

「どうしたんですか」

一緒に山へ行った研究員がきく。

「うむ。これを見たまえ」

樹が促すと、研究員は静かにテレビに目を向けた。

「……あの山、大変なことになってるんですね」

「すぐに元に戻る様な感じだったがな。コアの影響だろうか」

むう、とうなりながら黒服から研究者らしい白衣に着替える樹。

研究員のほうはもうすでに白衣だ。ひげのないあごをさすっていると、入り口のほうから声がした。

「林上博士、今戻りました。」

男性の低い声。織田 信研究員だ。眼鏡はかけておらず、二十代くらいの若さだ。ん、と、樹は振り返る。研究員は黙ってテレビの電源を消した。

「やあ、おかえり」

「やあ、じゃありませんよ。僕だけサバンナとかジャングルとかいるんなとこに行かされてしまって……よく生きて帰ってこれたなって感じですよ」

うんざりした顔をする信。そういうことよりもむしろ、どうやって樹が研究物を回収するのと同じ速さで帰ってきたのが謎だ。

「君、今パソコン持ってる？」

突然の樹の言葉。信は首をかしげながら、胸もとから次世代のタッチパネルケータイ、『MAXIMUM』を出した。全て音声のみで入力できるという優れもの。

「どうもありがとう」

ぱつと信からケータイを受け取り、電源をオンにする。こういうタイプのケータイにはパスワードがあるのだが、樹はそれをいとも簡単にくぐりぬけた。

「博士、どうして僕のケータイのパスワード知ってるんですか」

ものすごくいやそうな顔で、信が樹を見る。

「なあに、こんなの、信くんが見てない隙に僕のケータイとつなげて、データ解析すれば簡単に出てしまうものさ」

爽快な顔でなおも操作を続ける樹。

「……パスワード変えます。何桁もあつて、覚えられないやつに」

ぼそつとつぶやく信。そんなことも聞かず、樹はアプリの、インターネットに接続できるものをタッチ。するとパソコンでインターネットを接続したときと同じように検索画面が出る。

ただパソコンと違うのは、この手のケータイは、検索数が多いものが表示されることだ。

ぱつとそれまでの検索履歴が表示される。上の方は悪いものではなく、科学関係のものばかりだったが、一番下は、『パソコン解析』だった。

「織田くん、君、僕のパソコンをどうしようとしてるんだい」

それまでの陽気な雰囲気을くずさず、少し聞いてみる。

「いえ、僕も使うときが来たら使おうかなと」

「へえ」

うーんと少しうなつてみた後、検索キーワードを入力。項目は始めに出てくる『ウェブ』から『ニュース』に変えられていた。さらに、『サバンナ』と入力する樹。

つまり、樹は、神社近くで起こった出来事が他の場所でも起こっているのか、それを調べようとしていたのだ。

案の定、サバンナについての項目に、先ほどニュースでやっていたのと同じような内容が載っていた。と言っても森林が枯れる、というものではない。サバンナの動物たちが突然動くのをやめた。要

は、生活から活気が感じられない、無生氣の状態になったというのだ。樹たちのところとは違った現象ではあるが、似ている。そしてさらに、サバンの湿度が上昇したという報告もある。これは地球温暖化が進む現在ではいいことなのかもしれないが、サバンナに生息し、乾いた生活に慣れた動物たちにとっては深刻な問題だ。

「やはり、こうなるか」

むう、と樹がうなつた。

「どうしたんですか」

信が横から自分のケータイをのぞきこむ。そして目を見開いてそれを凝視した。

「こんなことが」

「私たちが行った先でも同じことがありました」
はあ、と信は息をつく。

「これって、報告すべきなんでしょうか」

「いや、我々の研究の内容では、信じてはもらえまい。なにせ、我々の研究は、かなり非科学的な要素をはらんでるから」

そう言つて、ジャングルなど他の項目についても調べた。状態は違えど、異常な現象が起こったという事実に関しては同じだった。

「博士」

ふいに、信が口を開いた。ケータイはすでに胸ポケットにしまわれている。

「なんだい」

「その、非科学的な研究物について、僕には説明されてないんですが」

「パソコンで調べてたんだろ。さっき検索履歴に出てたよ」

「いえ、別に、そういうわけじゃ……」

そう言つて、口をつぐんでしまった。何か怪しい。サバンナで何か変な組織と交流を交わしてきたんじゃないかあるまいな。

そう考えて、首を振る。

（いかにいかに。昔っから僕は想像しまくりだったからな。このパ

ソコンの事も、単なる偶然だろう。人間に対して疑いを持つ事は、あまり喜ばしいことではない)

そして、

「まあ、教えよう。ついてきたまえ、信くん」

信を、研究所にあるパソコン室に呼ぶ。研究員には待ってもらう事にした。

ガチャ。

ドアの金属部分がかすれる音がして、パソコン室のドアが開いた。そして、樹は入り口に最も近かったパソコンの電源を入れる。ブブ・・・・という音がして、パソコンの電源がつく。

三十秒ほど待つと、パソコンは完全に立ち上がった。これで説明のための準備は完了だ。データを見せつつ解説が出来る。

「なんですか」

「これから、今まで僕たちが調べていた『コアメダル』について完全に教えるんだよ。その方がこれからに支障をきたす心配もないし」
「そうですか」

そして、マイコンピュータのソフトから、あるファイルを開ける。そして画像ピットマップを開け、その画像を信に見せた。赤く、タカが飛翔した際の紋章。顔の映り方は横顔だが、体は翼を広げて体を全てこちら側に見せる形だ。

「これが、我々が研究していたもの、コアメダルだ。

コアメダルというのは、君は知らないかもしれないが、二十一年頃、テレビ朝日で放送されていた、『仮面ライダーオーズ』という特撮番組の中に出てきた、オーズの変身アイテムだ」

「僕が生まれる前ですね。でも仮面ライダーシリーズについては知ってます」

「だろうね。それで、コアメダルの中には、欲望の力がつまっている。最近出来たロボットに内臓されているのは快・不快を判別する機能だったね」

「ええ。これからのロボットの進化につながるものと教わりました」
「だが、このコアメダルには欲望、ただそれだけがつまっている。
快・不快以上に進化の力ギとなるもの。それで、僕はこのコアメダルを実際に製作することにしたのだ」

「そうなんですか」

「ああ。苦勞したよ。欲望というのは快・不快以上に生物的だからね。著作権に関しては、一応石森プロに言っておいたから心配ない。
このコアのテクノロジーは、このメダルに欲望と多少の力を組み込んである。磁力や電気等々だ」

「そうなんですか」

「そして、個別に作ってあるセルメダルは、このコアメダルの周りにまとわりつき、コアメダルの力を手助けする。もしかすると、場合によっては生物になる可能性も秘めている。」

だが、それが起こらない理由がある。コアメダルが十枚ある、ということだ。

コアメダルには、『十枚そろえば欲望は満たされる』というプログラムが入っている。と言っても、欲望が完全になくなったわけではない。ただ、セルメダルをまともになるというだけだ。だからさつきみたいなことになる。

十枚目が抜かれたとき、テレビでやっていたように、コアメダルが生物のような形を成す。その名をグリードというんだがね。

グリードは、完全な生物とはなれない。ただ漠然と、欲望を求めるだけだ。だからもし誕生したなら、人間社会は崩壊するだろうね」

「人間の欲望も限りなくありますし」

「そうだ。さらに悪いと、その無限の欲望をコアメダルの代わりにして、新規にセルメダルの塊を生み出しかねない。ここからは僕の想像だけだね。ちなみに、それが生物のような形を持った場合、テレビではそれをヤミーと呼んでいた。」

だから、十枚そろえたままで実験する事にしたんだ。いろいろな場所に行ってコアメダルを別々の欲望に触れさせた。今ディスプレイ

イに映っているタカのメダルのように、それぞれの動物と同じような環境においたのだ。その結果がさっきのさ」

「僕が持っていたのはそのメダルが入っていた石版なんですネ」
そして、そこに映っている『タカ・コア』をじつと見つめる。

「このコアメダルは、全部で十八種類ある。今研究中のを含めると二十一種類だけだね。研究中のは節足動物のものさ」
「なるほど」

「とまあ、そんな感じでいいかな」
にこつ、と信に対して笑ってみせる。

その後は、言葉を発することなく、それぞれのコアメダル、セルメダルの画像を見せて、メダルに関する説明は終わった。

「おう、卓人」

その声を発したのは、樹だった。

研究所の研究長室。今、樹は自分のスマートフォンを使い、弟の卓人に電話をかけている。

ピン、と手元のメダルを弾く。これは、十三歳の時から樹が大切にしているものだった。なぜなら、卓人が修学旅行の時に、樹が仮面ライダー好きだからと言って買ってきてくれた、仮面ライダーオーズの玩具、『オーメダルセット03』に入っている三枚のコアメダルのうちの一枚だからだ。

それは、樹が個人的にデイトールが気に入っている、『電気ウナギ・コア』だった。ヘビのように円を描いている電機ウナギが、ふと上を向いた——そんなところを上から見たものを彫ったメダル。

このタイプのメダル全般につけられている金属部分である縁は金に輝き、絵が彫られている青いクリアパーツの中には、別の玩具、『DX オーズドライバー』というベルトにスキャン出来るよう、ICが内蔵されていた。

樹は、一度このICのせいでデイトールが見えずらくなっていたので、色スプレーで見えやすくしようとしたことがあったのだが、結局やめた。そのとき持っていた玩具のコアメダルはたった十枚な上、卓人が買ってきてくれたメダルであるシャチ、電気ウナギ、タコ这三枚を失敗の危険にさらしたくなかったからだ。

他のコアメダルには、サソリ、カニ、エビがあるが、これは父が探してきてくれたものでやりたくない。

クワガタメダルという種類のコアメダルもあったが、これは電気ウナギと同じくデイトールが気に入っていたので却下。

ティラノという青紫色のメダルの種類も一枚あるが、卓人のほう

が大切にしていたのでやるわけにはいかない。

他にはカンガルー、チーターを持っていた。チーターはやっていかもしれないとも思ったのだが、色スプレーの値段を見て、こんな一枚のためにお金を費やしたくないと思ったので、結局中止した。弾かれ、樹の右手の手のひらに着地したメダルは、裏を向いていた。

横に走る二本の太い線が浮き彫りになっている。これは、DX版のメダルの特徴だ。

クワガタ、シャチ、タコを除いて、全てガチャポンで手に入れたコアメダルなので、このような線はついていない。かわりに、横に向かつて三つの星がついているのだ。

この電気ウナギは二本だが、その理由は『胴体のメダルだから』だ。この線の本数は、仮面ライダーオーズが使用した時に、どの部分がフォームチェンジ（番組内では『コンボチェンジ』と呼んでいた）するかによって決まる。頭なら一本、胴体なら二本、足なら三本だ。番組内のコアメダルもそういったディテールになっていた。

『樹か』

「うん」

『何の用？ もうすぐ来る樹の誕生日プレゼントのお願い？』

「三十九歳の誕生日間近なのに、そんなことするわけじゃないじゃないか」

『でも、結構前は言ってきたたよね』

「・・・・・・」

無言になる樹。メダルを弾くのもやめている。会話の途切れを感じた卓人は、ごほっと咳払いし、再び話し出した。

『ああ、ごめんごめん。わかったよ。それは置いといて、何の用だよ？』

質問を言い直す卓人。三十七歳になって、大人の風格とか常識とかを身につけたようだ。今度は気まづくなりそうなことは言わない。

「あー・・・・・・。メダル、完成したよ」

用件を伝える。すると、

『へー、すごいね』

という答えが返ってきた。

「本当は、ずっと前に出来てただけど、完全に出来たのが今日」

『そうか。まだ仮面ライダーオタクは続いていたのか』

「いいや、本物が出来ちゃった今、その言葉は通用しないぞ」

自慢げに言う樹。

「おまえの子供には伝えないで」

『なんでだよ』

「他の人に知られるとまずいじゃん、こっぴどいの。ほら、NASAも、その研究は十年遅れて発表してるって言うじゃないか。だから、卓人、おまえにだけ言っとくんだ。他の人には言うなよ」

『わかった。で、用件はそれだけか？』

「そうだね。テクノロジーやなにやらはもつと後に発表することになるだろうし、言うことはもうない」

『じゃ』

プツ、とボタンを押したような音がしたと思うと、樹のスマートフォンに『切断中』の文字が浮かぶ。

「よし、と」

スマートフォンを白衣の前ポケットにしまつと、研究長室を出た。

『よし、と』

研究長室からは少し遠いパソコン室。明るく証明がつけられた部屋の中で、一台のパソコンが起動していた。今の樹の声は、それから漏れたものだ。

そのパソコンを操っているのは、同じく白衣を身に着けており、樹よりも背が高く、若々しさを感じさせる男性。

信研究員だ。

このパソコンは、盗聴ソフトを起動させていた。信がくくくと顔をゆがめて笑ってみせる。

「博士……博士の研究は、僕が地球のために使う」

右上の赤いボタンをクリックし、ソフトを終了させると、カーソルを動かし、別のソフトを起動させる。パソコン解析ソフトだ。数分の間キーボードをカタカタ打つと、パスワード入力画面が出てくる。

「今度は僕が博士のパスワードを使わせてもらいますよ。博士の仮面ライダー好きははつきりしてるんだ」

そして、『cyclone-joker』と入力する。解析して手に入れたものの上、樹の好んでいる仮面ライダーに出てくる言葉でもあるから簡単だ。

するとファイルが出てくる。カチリ、とクリックすると、パスワードが表示される。これは、メダル保管庫のパスワードだ。

「heat-metalか、また簡単だ」

にやと笑うと、パソコンの電源をオフにした。

少しして、メダル保管庫に着いた。ドアのコンピューターのスイッチをカチリと押すと、再びパスワード入力画面が信の目に映る。

信は、周りに誰もいないか首を左右背後に振り、誰もいないことを確認すると、正解のパスワードであるheat-metalを入力。

決定ボタンを押して間もなく、メダル保管庫のドアが開いた。

中には、引き出しに入れている銀色の、大量のセルメダル、そして台の上にそれぞれの種類のメダルが十枚ずつ大事そうにメダルを入れるくぼみに入れられていた。

「博士みたいに保守的なやり方はダメだ。それじゃ世界を守れない。世界を守るためにはこのメダルで……」

そして信は、樹から『研究中だ』と言われていた節足動物のメダルの十枚目、サソリメダルを手にした。サソリが敵に向けて針を向けている様子が彫られている。サソリの体は浮き彫りだが。

十枚全てをポケットに入れると、次に、赤い鳥のメダル、黄色の猫のメダル、緑の昆虫のメダル、銀色の重量系動物のメダル、青い

水棲動物のメダル、そして橙色の爬虫類のメダルに向き直った。

その日の夜。

樹は、帰りに玩具屋によるのが日課となっていた。仮面ライダーはまだまだ存続しており、平成仮面ライダーシリーズも四十周年をもう少しで迎えるところまで来ている。

買い物が入ターネットによって行われるようになり、生き残るために企業合体が繰り返され、最終的には大きいものだけが残る結果となった。

照明が明るくなっている店内に入ると、すぐ左のエスカレーターに乗った。玩具屋は、この建物の一角に存在するのだ。

何階か上にのぼると、玩具屋のフロアに行き着いた。エスカレーターを降りるや否や、仮面ライダー商品の山に入っていく。

現在では、平成仮面ライダー四十周年記念作品が始まるうとしていた。樹も三十八歳で、もうすぐ三十九歳の誕生日を迎えるところまで来ている。

相変わらず、『ベルトで変身する』という方式は大体伝わっており、『変身』という言葉はまだまだ玩具会社であるバンダイのものだった。樹はそのことに苦笑すると、ベルトやら武器やらフィギュアやらを続々と、しかしすばやく確認していく。科学者にはそういうことに長く使う時間はない。

「あははは」

樹の耳に子供の笑い声が響く。今は九時くらいと結構遅い時間だが、樹は研究途中のときにはもっと遅かった。九時なのに子供がいるということは、きっと遠くから来たんだろうな……。樹はそう思った。今の世の中と矛盾している気がするが、ネットで商品が売り切れると、あまり人が来ないここは絶好の買い物ポイントとなる。

「僕と誕生日が近いのかな」

そうつぶやきつつ、樹は玩具屋を後にした。

次の日。

「よしと」

樹が黒いカバンを持ち、研究所に入ってくると、中の状態が何かおかしいと気づいた。

いつもなら、信研究員はまっさきにここに来て研究をしている。樹もまた、信と寸分違わぬ速さでここに来ていた。もしかしたら、今日は研究が成功した後だから遅いのかもしれないが。

それに、床が何やら銀色にキラキラと光り輝いている。

樹が走り寄ってその光を放つ物を拾うと、それは、樹にとっては見慣れた、『セルメダル』だった。他の物も同じ。裏面のバツ印が、朝の光に反射してキラリと光る。

樹はしばらく目を見開いてそれを見つめていたが、不意に口を開いた。

「まさか………信くんか」

樹の額にたらりと汗が流れる。

昨日の自分の予感が当たって、信が何かしようとしているのか、それとも信は無関係で、別の集団がやっていることなのか。だが、研究所内にいて、メダルの場所を知り得るのは、信じられない。それに、昨日、信のケータイを見て、検索履歴に『パソコン解析』があることを見つけていた。とすると、パスワードに関しても、信はそれを知ることが出来る、というわけだ。

となると、やはり信が怪しい。

いてもたってもいられなくなり、樹はカバンを最寄の床に置き、メダル貯蔵庫に走り出した。ここからメダル貯蔵庫まで、そう遠くはないので、研究ばかりで運動をまったくしていなかった樹にも楽に行くことが出来る。

しかし、距離的な安易さでは、樹の汗は止まらなかった。研究所内においての不安が、樹をいつになく速く走らせる。

メダル貯蔵庫前の廊下まで来たところで、突然樹の足が止まった。その目はまっすぐに貯蔵庫のほうを向いている。

「信くん」

その視線の先には、信がいた。その後ろには、人型を形成しているセルメダル六体を従えている。セルだからまだ銀色なので、その姿は特定出来ない。

「ああ、博士」

脱力した声で、樹の呼びかけに返す信。

「信くん、何をしている」

「ああ。世界を救うための第一歩ですよ」

その答えも、その意味も大体樹にはわかっていた。樹は叫ぶ。

「信くん！ それは世界を救うために確かに使用出来るかもしれない。だが、その使い方じゃ、ただ無駄に怪物を生み出すだけなんだ！！ そのセルメダルの塊を元に戻すんだ」

黒縁の眼鏡を湿らせながら、信に言う。信はにやと笑って、

「ダメですよ。もうコアメダルは彼らの体の中にある」

「ま、まさか」

「そうです。彼らはもう意思を持った……グリッドでしたっけ。それですよ」

その言葉に呼応するように、六体の体がピクリと動いた。

樹はしぼりだすように信に忠告する。

「信くん、そいつらから離れるんだ。死ぬぞ」

奴らが自由に動けるようになったら、一番に狙われるのは信研究員のはずだ。

ところが、信はそれに対し余裕の笑みを見せた。

「大丈夫ですよ。僕にはこれがある」

見せ付けるように、サソリが針を樹から見て左側に向け構えている黒いメダルを出した。今研究中の節足動物種、サソリ・コアだ。他と同じく、縁は金に輝いている。

「それを何に使ったもんだ」

「これを使えば、僕自身がグリードになれる。しかも、僕はすでに意識を持っている。つまり、メダルを抜いてやる必要はない。十枚全てを使用したグリードになれる。コントロールも自由だ」

言うが速いか、後ろのメダル貯蔵庫の扉を開け、サソリのメダルを四枚、カニが正面を向いているメダル三枚、エビが丸いところに閉じ込められたようなメダル三枚、合計十枚のコアメダルをその両手に五枚ずつ握り締めて飛び込んだ。

樹が口をわずかに開けて立ち止まっていると、しばらくして、メダルの塊が登場した。おそらく信研究員だろう。誰かがまどっているらしき不自然な形。

「はあ！」

信が気合を入れると、信がまどっていたセルメダルがパリ、と割れて、先ほどよりも人型として整った形になった。それだけでは終わらず、バキ、バキ……と何度も割れて形が整っていき、最終的には、侍の甲冑姿に似たものになった。おそらく、これがサソリ・カニ・エビのコアメダルで生まれるグリードなのだろう。最後に、セルメダルの銀色から、コアメダルのエネルギーによって、灰色に着色された。

「この姿……名付けるならば、『武者グリード』と言ったところだろうか」

灰色で、硬い甲冑に包まれた腕を見て、信研究員はつぶやいた。

「信くん、なんでこんなこと……」

樹が苦い顔をしてうめく。それに対し、信、否、武者グリードは、「博士、あなたはこの素晴らしい力を作り出した。……だがそこまでだった！」

あなたは一度でもこの力を良い方向に使いましたか？ 欲望を方向付けるなんて、世界を救う行動をしない口実だ！ しかも、力の使い方を誤り、自然から力を一時的にでも奪ってしまったじゃないですか。……僕は違う。この力は、世界を救うためにあるんだ」

グリード体であるため、口は動かず、体の震えでしかその感情を確認出来なかった。だが、その震えは、怒りによるものであることが樹にはわかった。

そして、武者グリードは走り出す。容赦なく樹を叩き潰して己の目的を前へ進ませるつもりだ。

「くっ！」

樹は間一髪、武者グリードのタックルを避けた。もうすぐ三十九歳になるような体では、動かすのもしんどい。

「博士、研究続きだったために運動を怠りすぎたようですね。それでは世界は守れない！」

右手を振るい、樹を弾き飛ばそうとする。これもまた、間一髪のところで避ける。鋭い攻撃によって切れた髪が中を舞う。

続いて足で蹴ってくる武者グリードを避けつつ、樹は不意に他の六体のグリードを見た。信とは違い、元々意識があったわけではないので、今だセルメダルから変化が起こらない。

ただ、テレビで放映されていたものと名前が同じと仮定すると、鳥系はアंक、昆虫系はウヴァ、猫系はカザリ、重量動物系はガメル、水棲動物系はメズール、そして爬虫類系は不明。と言っても、まだそのような形は微塵も見られず、ただ人型を保っているだけだった。

もしあれらもグリードになったら、最早樹は死ぬしかないだろう。そうなる前になんとかしなくては。

ん、と樹は気付いた。というよりも思い出した。起死回生の手があることに。樹が個人的に研究していた『アレ』の存在に。

「信くん」

突然、武者グリードに樹が語りかける。

「他のグリードもいるね」

「世界を救うための力ですよっ！」

ブルン、と振るった腕が樹の頬をかする。微妙に出血したが、構わず樹は続ける。

「ということは、君以外のグリードは、一枚メダルを抜き取る必要があるから、奴らの中にあるのは九枚」

「そうですね」

肩で息をしつつも、言葉を口から発することだけはやめない。

「じゃあ、残り一枚は、君が持つてるってことかい？」

「はい」

何の惜しげもなく武者グリードはさらさらと答えていく。

（必要な要素はそろった……）

樹は無言で少しだけ口を横に広げて笑みを見せる。

「言つときますが、十枚目は渡しませんよ。あのメダルもまた、世界を救うために役立つ」

樹の表情に何かを感じたのか、武者グリードが言った。

「いいや、何でもないさ」

「じゃあ安らかに倒れてもらいましょうか」

今まで以上に速いマックススピードで、樹に腕を叩きつける武者グリード。遊びは終わりだ、と言わんばかりだ。

「うあっ!!」

硬い感触が樹の体に響く。うずくまる暇も与えず、グリードたちから遠く離れたところまでとばされる。

骨まで響く衝撃に顔をゆがませながらも、樹は立ち上がり、走り出した。

（これを待っていた!!）

「待て！」

「うおっ！」

老齢とは思えない速さで、樹はとにかく走る。目的の場所に届くまで。

樹を追って走り出そうとした武者グリードは、突如体に痛みを感じ、立ち止まった。ふう、とため息をつき、少しずつ歩いて行くほかに切り替える。

「この状態になった直後だから、体になじんでいないのかもな。水

溶液も、完全に内容物が溶けるまでは水溶液とは呼べない。行くよ、グリードたち」

くい、と手招きすると、グリードは歩き出す。コアメダルの磁力のような力で引いているため、歩くと言うよりもむしろ引きずられていく感じがたが。

自由に動くことが出来ない今は、とにかく自分の近くに引き連れておくしか方法がなかったのだ。

「はあ、はあ………」

年齢に似合わない速さで走ったため、かなりきつそうに呼吸をしながら、研究長室のドアを開けた。あの研究物は、まったくデータを残していないため、その存在は樹しか知りえない。

樹は無言のまま、監視カメラの死角であるイスのしたにもぐりこみ、ゴソゴソと何かを動かした。しばらくすると、ガチャ、という音が響き、地下室と呼べるものではないが、箱のようなものが床に埋め込まれていることが確認出来るよう、床がパカリと開く。

その箱は、以外に強靱なようで、樹が無理矢理それを取り出して床にドスン、と乗つけても壊れていることは確認できなかった。

実は、この箱は真空冷凍室。真空状態のまま低温で物を保存出来る便利さだ。この研究物は、どうしても真空の中で保存する必要があるため、緊急で使用したのだ。

パスワードである『319624050』を入力すると、空気を入れるバシュという音が聞こえた後、床と同じく軽くパカッと開いた。白い機体の中から出て来たのは、大人の腰にもはまるような長さを持ち、その前部分にはバックルが合体している、仮面ライダーの変身に使いそうなベルトと、樹が息吹神社に持って行った物と同じ、メダルを入れる石版が入っている。

それらを出すと、樹は箱を閉じ、再び床の中にしまい、床のフタを力チリと音がするまで押し込む。

そのバックルは、番組内で仮面ライダーオーズが使っていた物と

本当に良く似ていた。

上から見ると、銀のボタンのようなものがあり、装着者から見ると、右から一、二、三のマークが浮き彫りになっている、そのうち『三』は本当にボタンで、三のほうが下に下がり、ななめにすることが出来るこのバツクルを、もとに戻しやすく、引っ掛けを解くボタンとなる。それにはメダルをセットする部分があり、黒い背景にこの部分から波動が放たれているような青い線の絵柄が塗りつけてある。他に、ななめにしたときに、線がメダルのところを貫くようになっていた。ただし、両端のところのみは、ななめにした場合、地面に平行になるように線が付いている。

横側には、黄色く縁取られ、持ち手とは反対側のところに三つの銀の玉が、楽譜の線のような銀色の線に描かれている円状のスキヤナーが付いている。これの名前は、『オースキヤナー』と言った。

これらのベルトを総合的に、『オーズドライバー』と作品中では呼ばれていた。

カチャ。

次にメダルが入った石版を開けると、中からは、他と同じく、紫のメダルが四枚、赤紫、青紫のメダルが三枚、計十枚のコアメダルが入っていた。

信には、これらの話はしていなかった。

実は、これはコアメダルのプロトタイプで、樹がまず最初に作って密かに保存していたものだ。それゆえ、樹好みの改造が施されており、他とは違って、まったく欲望には触れさせず、真空状態で保存し、他とは違う力を発揮するようにしていた。

樹は、真剣な表情で、メダルの内それぞれを計三枚抜き取り、バツクルにセット。

カシャッ、カシャッ、カシャッ。

連続でメダルをセットしていく。

左から、紫色で、タカメダルと同じような構図で描かれたプテラノドンのメダル、プテラ・コア。

トリケラトプスが左側を向いているトリケラ・コア。その色は、赤紫。

そして、葡萄ぶどうのような青紫で、トリケラ・コアとは対照的に右を向いたメダル、ティラノ・コアだ。

残りのメダルは全てポケットにしまい、ベルトをカチャ、と装着する。メダルの縁が金色に光った。

樹は立ち上がり、部屋の机の反対側の位置の壁に向かい、ピ、ピピと、右端の電卓のような小型コンピュータにパスワードを入力すると、壁が大きく開き、大量のセルメダルが表あわになる。ふー、と息を整えると、意を決して、目を閉じる。

しばらくすると、武者グリードがずしり、ずしりと、重く踏みしめるように部屋に入って来た。後ろには完全に体と意識を得たグリードたちが続く。

奇遇なことに、彼らの名前は、テレビ放映時とまったく変わらなかった。

「カザリ、樹博士がいた。一気に行くぞ」

ひそりと言う。『カザリ』と呼ばれた猫系グリードは、無言でうなずいた。

そのとき、樹が唐突に目を開いた。

「来たか、信くん」

「今度は容赦しませんよ。地球を守るために」

「そういう考えはよしたまえよ、信研究員」

カシツ、とオースキャナーをベルトから外し、オーズドライバーをななめに傾け、一気にスキャンする樹。

「……僕だって、世界を守るために研究してきたんだ……」

その目には、微塵の迷いもない。

「博士、そのメダルは。一体何を――」

紫色のメダルに気付いた信が声を荒げるが、それをオーズドライバーから流れた音声と歌がさえぎった。

『プテラ！ トリケラー！ ティラノー！！ …… プッツ、トツ
ツ、ティツツ、ラツツ、プットツ ティツラノォ、ザーウルース
！！！！！！』

その歌を聴いた瞬間、樹の意識は途切れた。

「・・・はっ!!」

気を取り戻し、樹はむくりと起き上がろうとした。すると、ビクン、と電撃のような痛みが走り、筋肉が微妙に痙攣。痛みは、体全体に広がっていた。全身の骨にヒビが入っているような感覚。事実、それに近い状態にあることは確かだ。額には、痛みにより脂汗が浮かんでいる。

さらに、右手の平にずしりとした感触を感じる。何とか顔を起こしてみようと、コアメダルが目映る。先ほどの紫のコアメダル三枚はもちろん、追加で六枚あった。

一枚は、信に最初に見せたタカメダル。いつも通りの赤色をほこっている。

次に、黄色いメダル、トラメダル。トラが、ちょうど目の前の敵を威嚇して歯をむき出しにしたところを、顔をアップにして描いた構図だ。

さらに、バツタメダルもある。この色は緑。バツタを正面から見た、それだけの構図だが、これほどバツタの存在感を示す構図はない。

ウナギメダル。科学の研究物のため、色は紺に近い青が濃くなっているが、確かに、卓人との電話で持っていたものと同じ種類のもの。

ゾウ。これはバツタメダルやトラメダルと同じく、顔をアップにした、牙を持つゾウが描かれている。

そして、ワニメダル。ワニを円形の檻に閉じ込めたような構図を示していた。色は、赤が強いオレンジ。

組み合わせから察するに、これらは、信が所持していた十枚目のコアメダルたちということであらう間違いないだろう。それぞれのメダルの十枚目の種類は、樹が一番良く覚えていたのだから。

「なるほど。この十枚目たちを使えば、勝てるかもしれない」

樹は、痛みに耐えつつ、微笑する。十枚目の組み合わせだけで勝つ方法があるのだろうか。

その種明かしは、樹が毎回聴いていた、あのCDにある。そう、『タカ』、『トラ』、『バツタ』の、十枚目の組み合わせだけで、コンボが形成される。さつき変身したはずのプトティラコンボのようにつまくはいかないかもしれないが、コンボというだけでも勝機は出て来る。能力までは明かさない。何故なら、樹の使用するタトバコンボは、テレビ番組でやっていた通りのタトバコンボの能力ではないからだ。

それはさておき、一体何がここで起こっていたのかを確認しなければならぬ。樹はそう思った。さつきまで研究長室だったその部屋は、今は、ダイナマイトを四方で爆発させたかのように、その種の部屋であつた痕跡はどこにも見当たらない。あるのは、無数の大小のクレーターと、かなり少なくなつたいくらかのセルメダルのみ。「はあ……」。『プトティラコンボ』はやっぱり、多量のセルメダルを使うか」

やれやれと、しかし震えながら声を出す。プトティラコンボというのは、『プ』テラ、『ト』リケラ、『ティラ』ノの組み合わせのことである。

タトバコンボと、同じ色のメダルの組み合わせは、『コンボ』という形態への変化が行われる。それがオーズ。スロットでうまくマーカーを当てると、メダルが大量に出て来るのと同じように、オーズもまた、そのような『組み合わせ』による戦いを主としていた。

メダルを全て、紫のメダル七枚が入っているポケットに突っ込むジャリ、という微かな、コアメダルがこすれる音がするが気にしない。コアメダルはそう簡単に壊れる研究物ではないからだ。

風邪をひいたときのように、まるで体が重力に耐えられなくなつたかのように、体はとにかく重い。だが、とにかくどうにか立ち上がると、ずり、ずり、と、監視カメラ室に向かうことにした。監視

カメラならば、研究長室で何が起こったかをまったく逃さず撮影出来ていたはずだ。

何とか立ち上がり、壁によりかかる姿勢で進む。壁に全体重をのせることで、重力に耐えられない感覚を抑えられた。それでも、今回のだるさは風邪をひいているときをはわけが違うため、やはりきつかったが。

「はあ、はあ………」

力の羽がこすれるようなうめきを漏らしながら、進む。いつもだったらわけなく、大した距離に感じないはずなのに、今回だけは、あまりにも、あまりにも遠く感じる。それは、プティラコンボによる身体に対する副作用だと考えられる。

「まったく、今回ばかりは仕方ないけど、これからはプティラコンボはやめた方がいいかもね………」

簡単ではなかったが、ようやく監視カメラ室に着く。そして、イスに座ると、やっと一段落つき、ふー、と息を吐いた。この先の作業は、手を動かして目的の映像を探すだけだから、大した負担もないだろう。

時間が今からそう離れていなかったために、程なく目的の映像は見つけられた。カチャカチャとキーボードを叩き、最後に再生ボタンを押す。

これから、樹の変身した仮面ライダーオーズのプティラコンボの戦いの状況がわかるのだ。

仮面ライダー好きの樹は、死にそうだったにも関わらず、少しばかり楽しみでいた。

「よっし！ ついに変身か！」

電撃に例えられるほどの痛みが走っても、こういった楽しみがある場合には人は痛みも感じないものだ。眼鏡の奥の目を輝かせて、映像に視線をこらす。

ついに、その映像が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5126w/>

〇〇〇 ～君たちがいる世界で～

2011年10月15日09時14分発行